

さて、日本連合にとって頭の痛いことの一つに数えられるのは転移元年代の格差である。おおむね大正(太正)時代、大戦時代、20世紀末期、21世紀中途というように分かれているわけだが、なかには30世紀にいたろうかという人々も居ないわけでもない。まあ、人工比率からすれば20世紀末期が半数をしめるわけだが。

さて、ここで時代格差で大きいのは終戦以前の地域になる。最近の文明機器についていけないのもあるが、もっともたるのは制度・常識の違いがある。

農村部に焦点を合わせてみる。

終戦以前の農村は大地主と小作農という、いわば中世時代の貴族と農奴という関係に近い状況下にある。それは貧富の差としては非常に大きいものである。小作農はいわば「借家であれ、一応家をもつ」レベルであり、ホームレスの一步手前ととってもいい。

このへんは地主の裁量によって貧富に多少の違いがあるがおおむねは困窮の極みにあるとわかっていい。だからこそ出稼ぎや女工といった労働力が工場、ひいては軍隊に流れていくわけだ。とうぜん小作農にとっては面白くないはなしだったが...

これが変わるのは終戦直後である。

農地改革 地主から土地を取り上げ(強制買い上げ)て小作農に土地を与える というGHQの政策を推進した自民党政権はこれによって多くの農家の長期にわたる支援をうけることになる。

結局のところ、一応戦前であっても契約社会(資本主義はそういう社会でもある)なので一方的ではあるがそういう労働協約を結んでいる。

現加持政権はこれの改善をすすめる方向ではあるが 度重なる襲撃、それ以上に重要な審議...交易路の確保、有事法制などなどに追われ、本腰をいれられない状況である。

もうひとつの問題は 差別意識である。よく言われる部落差別などだ。

これは今現在でも根強い(とくに年寄り連中)が、長い啓蒙活動もあり、筆者の周りではあまり見受けられる事は無い。とりあえず見ない。もっともこれが一番影響するのは就職と結婚なんだが...当方はこの手の経験が薄いので不明といえば不明である。もっとも差別するほどの余裕もない、というのが企業の本音だろうし、外国の人間にしてみれば「それはなに？」なので少なくなりつつあるだろう。

まあ、さすがに2000年を超えた時代の人間にとっては「部落って何処？」という話だったりもするが、大正時代の人々にとっては常識のようなものであり、差別するのが当然というものである。小学校に上がる前から家族から言われつづければ当然というべきか。

ここで問題なのは存在力という点で言えば「部落」というのはそれはそれで人々の記憶に植え込まれている点においては同義になってしまい...この世界にも現れている。そして差別されるがゆえにおおむね彼らは貧困に喘ぐ。貧困に喘ぐがゆえに仕事を選ぶ余裕が無いという悪循環に陥りやすい。

表面にあまり出てこないがゆえに対処の方法に限られるという難問であり、当面は解消できずにある。

時空融合にて利害が生ずることはある、が...害だけが出現する事もあるのである。  
まあ、利害など人の主観のものでしかないのだが。

## SSF<sub>W</sub> Outside Story

### 新世紀アリス伝 / Face Earth

#### Ep02. 季節はずれの恐ろしさ

#### A = PART

Date 02.04/18

時空融合に建設された新しくはある、雑居ビル。その一角に羽村亮と七萩鏡花の二人が開いている退魔事務所が存在する。

ちなみに二人は神秘学に属する人間には珍しく登録を行なっている。ゆえにGS業界では新進気鋭の新人として認識されている。とくに若いわりに実戦経験が豊富なところと一般的な相場に比べると安価（とくに某有名なGS業界のトップに比べれば1%未満）で請け負うためわりかし忙しい。

ちなみに彼らの仕事選択の基準は

「金より気楽さ」

だったりする。なんでも二人してどっちを重視するかを話し合ったら一発で合ったようである。安価なために仕事を選べる環境をうまく使い「本物」が存在し、自分たちの手で解決できる仕事をとっているのだ。

まあ、そんな二人だがあの日にひょんなことから人手を確保する事になった。いうまでもなく時空融合で現れた相羽カイト一行である。

で、相羽カイトとミューゼルの二人は今、この世界での初仕事に挑んでいた。

内容は簡単なもの。

邪霊が家に住み着いたのでなんとかなりませんか、である。

GS系幽霊の仕業であることが依頼主の心から悟った鏡花がGoサインをだして、仕事を受けたのである。

公正なるくじ引きの結果は亮、カイト、ミュウの3人で行なうことになった。

昼の間に依頼主から簡単に家の間取りを聞き取ったあと、その家の庭先でひそひそ話。

「まあ、能力はたいしたことが無いと思う。騒ぐだけが脳の幽霊のようだから」

「確かに...昼間とはいえ、ここまで気配というものがしなければなあ」

「うん、そうだね」

カイトとミューゼルは亮の言葉に頷く。

「夜にならないと出てこない以上...夜になるのを待つか？」

カイトの問いに亮は頷く。

亮には出てこない幽霊を叩くだけの技術がない。御札を始めとするGS世界のオカルトグッズ関係を持っていないがゆえともいえるのではあるが。

そして、夜がくる。

「うらめしや～～」

「うら！」

カイトは手にしたハンマーで幽霊を殴る。すると幽霊は霧散して...出てこない。

...幽霊の撃破はカイトのホーリーハンマーの一撃で終わってしまった。

「...これで終わりか...？」

カイトはあまりにあっけない手ごたえに流石に疑問の声をだす。亮は苦笑しながら頷くしかなかった。

「さすがにこれは...よわすぎたな。」

「全くだな...これで仕事完了になるのか？」

「再び出てこなければ...だけどな」

Date 02.04/30

この後、いくつかの仕事を請け負ったが...いずれもカイトのホーリーハンマーの一撃か、甲斐那の刀の一振りですぐに終わってしまうという結末だった。

「強いですね。」

亮は4人の実力にただ、感心するしかなかった。

「私からすれば、君たちも筋がいいと思うが...」

甲斐那の言葉に刹那やカイトは頷く。

「ねえ、亮くんは鏡花ちゃん。」

「なに、ミュウ？」

「魔法、覚えてみない？」

亮と鏡花は視線を交わす。

「覚えられますか...？」

「私が教えてあげるよ。カイトくんだって、一ヶ月ちょっとでできるようになったんだし。」

「...まあ、基礎の基礎はならってたんだけど...」

カイトが鼻を掻く。

「初歩の初歩である『戒めの拳』や『癒しの指』ぐらいなら一ヶ月ぐらい本腰いれて行なえばすぐに覚えられるかな？」

「私たちも最初はなににもわからなかったところから始めて使えるようになったんだもんね。」

二人はそれならば、教えてもらおうと頷いた。

ちなみにこの申し出の意味を二人は気付いていなかったが、日本連合にとって彼らの技術は非常に咽喉から手が出るほど欲しいものなのである。

とくに異能力としての素養がないものでも『魔法』がつかえるようになる(もっとも教える人間の使用魔法が偏っているのではあるが)技術のひとつなのである。

まあ、つかえるようになったとしても実用性に足るものかどうかは別物だったりするのだが 素養がここで始めてモノを言うのだ それでも神秘に属する、しかも気を使った格闘技ではなく『純粹なる魔法』に相当する教授可能な技術ということには変わりはない。

もし、今現時点において日本連合に知れたら即行でミューゼルは最重要人物の仲間入りである。...それ以上に死者蘇生の秘儀を扱えることが知られたら言うまでも無くSSSクラスの機密事項になる。

もう一つ付け加えるなら、基礎の基礎を教えるだけならカイトや刹那にだってできるので彼らも同様に重要人物となる。

「じゃあ、今から教えていこうか。」

「うん。...っと、そうだ。真言美ちゃんも呼んだほうがいいわよね。亮。」

「そうだな。ちょっと待って下さい。」

亮は片手を上げて携帯で電話をかける。すでに高校の授業は終わっている時間である。

「あ、真言美ちゃん？ ちょっとこっちに来れるかな。魔法を教えてくれる人物が見つかったんだ。」

「その少女は...君達と同じとみていいのかな？」

甲斐那の言葉に亮は頷いた。

電話をかけてから待つこと30分弱。

三輪真言美 若く活発な髪の長い少女 と、百瀬壮一 ちょっとヤンキー入って

る少年　の二人がやってきた。

「先輩、魔法を教えてもらえるって...この方からですか？」

「ああ。...真言美ちゃんたちは始めて会うんだっけ。」

「はい。」

「半月近く経つのに...なあ」

亮は苦笑して二人に4人を紹介する。一方で鏡花が4人に二人のことを紹介する。

「こっちが三輪真奈美ちゃん、あっちが百瀬壮一。モモって呼べばいいから。」

「せ、先輩...そんなどうでもいいような紹介は...」

「そういう紹介はないだろ...おい...」

真言美と百瀬は二人とも肩を落す。何を言っても無駄なのは二人ともわかっているからである。

「んー、真言美ちゃんは魔法使いなのかな？」

ミュージールの言葉に現地人4人は一斉に彼女の顔を見る。

「え、ちがった？」

「一発でわかるなんて...冒険者の経験って大きいのね...」

鏡花は唸った。

その後、ミュージールと刹那の二人による魔法学の講義が始まった。魔法の使い方の基本になる呼吸法、精神集中　そして魔法というものの体験。

「魔法も頭じゃなくて身体で覚えるところが多いからね。最後は知識はあるけれど...最初の間口は身体で覚えるものなんだ。」

ミュージールはそうやって最初の講義を締めくくった。

「どうだった、真言美ちゃん。」

「うーん、なんか言霊でもって魔法を使うのと似てるような感じですね。」

真言美が鏡花の問い掛けにそう答えると、刹那が彼女の肩を叩く。

「真言美さんには特別授業が待ってます。」

「え、」

「それでは『呪文』を教えましょうか」

「...はい！よろしくお願いします！！」

一瞬固まった真言美だったが、刹那のその提案で体中で喜びを震わせて頷いたのだった。

「...いずみ達と連絡取れなくなって呪文関係の発展がなかったからねえ。真言美ちゃん、うれしそ。」

「鏡花、俺たちも早く傷を治す魔法ぐらいは覚えなとな。」

「そうね。...とくに亮は奥義のようなものが何一つ無いしね。」

「う、悪かったな。」

鏡花の言葉に甲斐那が「ほう...」と顎に手をあてる。

「羽村君はなかなかの腕前とみたが...応用技は持っていないのかね？」

「...はい。」

「ふむ...ならば私がすこし手ほどきをしてやろうか？」

「え？」

「私の奥義は無理としても...鷹眼ならすぐに覚えれるだろうし、走狐襲あたりなら非常に心強い技になるだろう。」

甲斐那はそういうと愛用の刀を手にするすると事務所の扉を開け放つ。

「羽村くん。私はここの地理にはまだうとい。人の迷惑にならない場所を教えてもらいたい。」

「あ...はい！」

亮はそういうと甲斐那のあとをついていった。

「はあ、亮も真言美ちゃんもあついわねえ」

「じゃあ、鏡花ちゃんには補講授業をしてあげるね。」

ミュージエルは鏡花の首根っこを掴むとずりずりと引きずっていく

「ちょ、ちょっとやるって行ってないって！」

「補講だから拒否権はないよ。」

ミュージエルのきっぱりした答えに鏡花は観念して引きずられていった。

のこされたのはカイトと百瀬の二人。

「...んー、百瀬君。」

「なんですか？」

「あんまし人に誇れたものじゃないけど...重要な技術を教えてあげようか？」

「なんですか？」

「開錠技術に罠の発見・解除...まあ、探索にお役立ちのスカウト技能」

「...たしかに誇れたものじゃないツすね。」

「だけど...居ないと困る。」

「...それもわかります。でも、俺できるでしょうか？」

「できると思うぜ。なんか、昔の自分みてるみたいだし。」

「...どういふ」

「なんの力もないのに根性だけは一人前。」

「...」

「昔、な。俺はミュウを守れなかったんだ。その事実を思い知らされたときの俺に近いよ。君は。なんとなくだけどな。」

カイトはそういうと頭を搔いて、しばし考え込む。

「とはいえ...なにから教え込むべきかな？」

「そこは、お任せします。」

「うーん、なら、敵を引きつける方法からいくか？」

「『引きつける』方法かいつ！」

「重要だぞ。隠れてる敵をおびき寄せる事もできるんだからな」

百瀬の突っ込みに苦笑しながらカイトは「そとでやろう」と手招きする。

こうして仕事と鍛錬を繰り返して日が進む。

いつしか東京湾に巴里市の一部がくる。

そして、それにとמונא, 神秘学において大きな意味のある事件が起きた。世に言うベヒモス事件である。

---

---

あとがきというか、なかがきでふ。

よく考えたらカイトくんは好きなように成長できる（それによって技も違う）のでここでのカイトくんはどういうものなのかをちょっと。

基本的には「スカウト7、神学3」にしています。彼の手にかかればどんな鍵も3分つかえば必ず開きます。

なんでスカウト...かと言われれば、原作のゲームってスカウトが一番クリアが簡単なんです（おい）。

ただ、神学3は「ホーリーハンマー」と物品鑑定の最低ライン...なので保持してるんですが。

能力は敏捷 > 体力 > 精神 > > > 詠唱になってます。なので彼の魔法は致命的に遅いです。ま、カイトくんはホーリーハンマーをメインに使ってますので魔法を乱発できる余裕は無いんですが。

ちなみにミューゼルの詠唱時間は癒しの指や戒めの拳に関して言えば瞬間同然と考えてます（GURPSあたりの仕様で）。

---

---